

牛とIT/ICT

編集にあたって

大澤博隆 | 筑波大学 原田英男 | (一財) 畜産環境整備機構

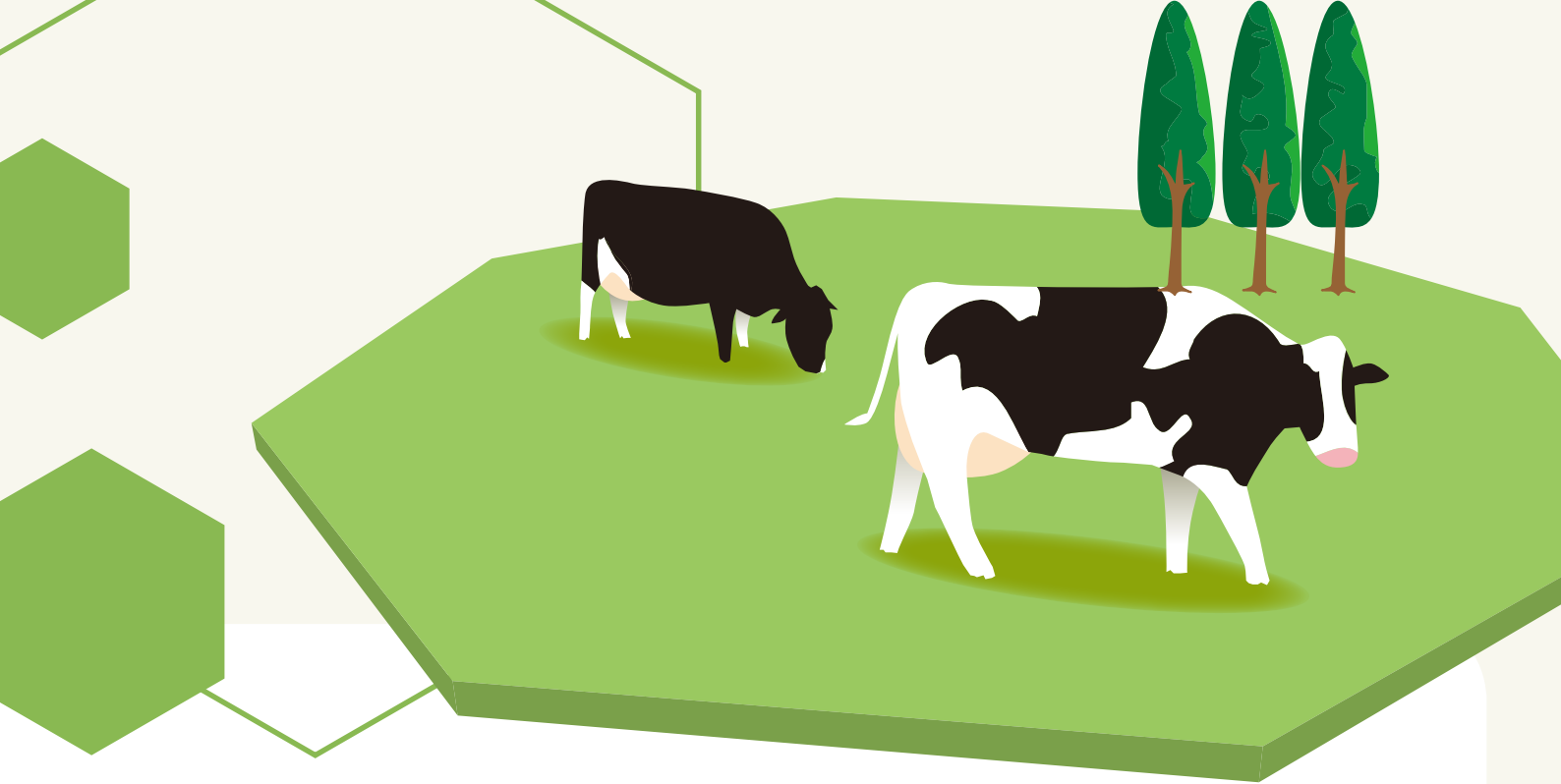
家畜は、その生産物を人間が利用するため、長い時間をかけて人間が飼いならした野生動物の末裔である。その中でも牛は、古来より人間の生活を支えてきた動物の1つであり、その乳や肉は現在の我々の社会に欠かせない構成要素である。また牛は我々に近い哺乳類であり、きわめて繊細な知能を持つ情報処理主体でもある。こうした牛を管理し、我々の社会に生産物をもたらす業種が、酪農と呼ばれる業種である。

この古来からの人間の営みに、現在の情報技術はどのように関与し、価値を与えることができるだろうか。今回の特集では「牛とIT/ICT」と銘打って、5件の記事を掲載し、この問題に取り組むことになった。主に北海道の酪農が中心的なテーマだが、内容は多種に渡る。酪農家自身にインタビューをしながら、論点を浮かび上がらせるもの、酪農業者のコンサルタント業者による解説、酪農家自身によるマネジメント紹介、農業協同組合による酪農の発展、そして酪農ベンチャー

による酪農・畜産の未来など、幅広い観点で「牛とIT/ICT」というテーマを掘り下げるようになった。

第1の記事は、AIR（人工知能が浸透する社会を考えるワークショップ）による竹下牧場のインタビュー「情報技術による試行錯誤：酪農現場の雇用・経営・コミュニティの変化」である。AIRは情報工学系の研究者と、倫理、哲学、表象、STS（科学技術社会論）などの人文系の研究者によって構成されるチームである。彼らは北海道中標津町にある竹下牧場のインタビューを行っている。多様な観点からの質問を酪農業者に投げかけることによって、IT技術が実際に、現場においてどのように応用されているか、浮かび上がらせている。

第2の記事は、東京大学政策ビジョン研究センターの江間有沙氏による、「牛と最先端技術に向き合う酪農コンサルタント」である。こちらの記事は酪農コンサルタントへのインタビューである。



第1の記事が個々の酪農家が直面した現実をインタビューで浮かび上がらせているのに対し、複数の酪農業者と接するコンサルタントが見る現実を明らかにしている。データ化されることによるメリットが示される一方で、国内の酪農情報が海外に集約される危機意識、生産性という短期的な視点だけでなく、牛自身の健康管理を扱う「カウコンフォート」が重要である点など、留意しておくべき点が示されている。

第3の記事は、酪農家である宮坂隆男氏自身による「問われる生産価値、酪農経営と情報活用」である。ここでは酪農マネジメントの現状が紹介されている。宮坂隆男氏は酪農家が個々の経営に限定しがちな情報を「TMRセンター」という「飼料配合配達組織」を通して飼料中の栄養成分と乳量成績を結びつけるシステムを確立した。具体的なマネジメントの例を交えて、どのような技術が必要となるか、現場の立場から訴えかけている。

第4の記事は、十勝農業協同組合連合会の太田

雄大氏による、「十勝酪農の発展とICTの導入」である。北海道という土地を開拓した生産者たちが、どのように問題点を解決していったかが書かれている。「農協連合会」という単独農協を超えた情報量を活かして個々の酪農家の負託に応えるための模索を続けている。

第5の記事は、酪農や畜産の未来のビジネスモデルを説明する、ノベルズ畜産IT企画部の西谷哲也氏の「牧場の生産性を高める情報戦略の現状と未来」である。地域のブランディングを含めて、酪農・畜産をどのように世界に打ち出していくべきかの説明が行われている。

以上5件の記事を合わせ、人と牛の関係に、どのようにIT/ICT技術が入り込んでいるかを特集した。

(2018年9月17日)